カール

アルカディア王国南部、ラコニア。激戦区であり、元は今対峙している質お王国の一角、おストベルグ王国の領土であった。その前はアルカディアの土地であり、さらに前はおストベルグの、さらに――

そのような土地ではまともに畑作に勤しむ者もおらず、ただ奪い合いが続く荒れ果てた土地しか存在しない。込んで定住しようとする酔狂なものもいない。もはやそこに利益はなく、ただ面子のためだけの闘いが続くのみである。

今日もラコニアでは予定調和のような戦が繰り広げられていた。

「……疲れた」

砦から少し出た先の平地、そこで行われた野戦の中、白髪の男がいた。

「あーはいはい。やる気があるのはいいことだね、うん」

「うえりゃああああひゅえええええええええい！」

「……鍬でも持って畑耕してろ。来世でな」

ぽーんと刎ねる首。げんなりする白髪の男。

「雑兵同士の小競い合い。こんなとこで頑張っても１銅貨の得にもなりゃしねえ」

軽々と敵兵の攻撃をいなし、ひょういひょういと敵兵の首を刎ねていく。しかし乱戦の中、多少目立ったとしても『上』に覚えがよくなるわけもない。そもそも覚えられてすらいない。せいぜい近くの雑兵に毛が生えた程度の上官にいいように使われるだけ。

「その上官も自分のことで必死だから俺のことなんて見てすらいねーし」

ぽつりとこぼれてしまう愚痴。青年にとってこの場は何も学ぶことはなく、そして一切の生産性も存在しない、まさに土地のような空間であった。

「帰ってメシ食って寝よ」

そう考え、ほんのり下がり気味で戦う青年。気づけば日暮れ。そろそろ戦仕舞いである。

今日もまたいつもの戦が終わった。いつも通り引き分けである。

ラコニアの砦は行商が押し寄せている。この土地に生産性は無くとも、兵士は物を買うし、金払いも悪くない。結果、案外繁盛している。ほとんど屋台だが、一部は家屋を間借りしている店もあった。

「兎肉のシチュー、兎多めで」

その屋台群の一角、そこまで繁盛していない店で白髪の青年は食事を取っていた。

「お待ち」

ぶっきらぼうに手渡されたそれは、やｈりぶっきらぼうな盛り付けであったが、量はかなり多い。値段は安い。そして味は――

「相変わらずまずい」

はっきり言うが、店主は振り向きもしない。青年もまた味を気にしないのかずるずるそれをすすり、兎の肉をかじる。

無心になって食事を続けていると、となりに人の気配がした。気にせずスプーンを振るう青年。

「えっと……隣の人と同じのをください」

主体性のない注文。店主も青年も気にせず己が作業に没頭する。店主は適当に鍋からシチューをすくい、適当に皿にぶちまける。あまりの適当さに、注文した人間は唖然としている様子であった。この店、リピーターはほとんどいない。

「お待ち」

出された料理を見て絶句。食べてみて絶句。そして残された量を見て泡を吹く。それがこの店に初めて来た者の行動パターンであった。

「す、すごいですね。これを食べられるなんて」

どうやら隣の人物は青年に声を掛けているようである。青年は白髪を揺らし顔を上げた。

「あ、その、僕は怪しい者じゃありません。同じ隊に所属しているカール・テイラーです」

カールと名乗る少年然とした男を見て、青年は（そう言えば新しく入ったのがいたなあ）くらいの記憶が一瞬よぎる。くりくりした金色の髪は一見して育ちの良さを感じさせた。

「ウィリアム・リウィウスです。よろしく」

そう言って食事に戻る白髪の青年ウィリアム。元はアルという解放奴隷であったが、今の彼はウィリアム・リウィウス。ルシタニアから来た三級市民である。

「知っています！みんな噂していますよ。白髪のすごいやつがいる。あと……舌が少しいかれてるって」

カールは、最後の部分は店主に聞こえないようにこわごわと言った。まどろっこしそうにウィリアムは再度顔を上げる。

「用向きは？」

「えっと……友達になれたらなあって」

その瞬間、ウィリアムは嫌な既視感に襲われた。カールの顔が、赤い髪の青年と被る。赤色と金色、違うのに、雰囲気が重なる。

「……申し訳ないけど断るよ。此処ではハマり友達を作らないようにしてるんだ」

ゆえにウィリアムにとって好ましい相手ではなかった。基本的に豊かで満ちたりた相手は大嫌いである。

「あ、そ、そっか。だったらしょうがないね。あはは」

露骨にがっかりするカール。その顔もまた『自分』に見える。成り代わり、死んだはずの『自分』に――

「そんなことよりたべたらどうだ？せっかくのシチューがさめてしまう」

そう言って半ば強引に話を終わらせ食事に戻るウィリアム。カールは「う、うん。そうだね」と返事をしてシチューに向かい、シチューを口に運び、倒れ伏した。

「お、おい！？どうした！？そんなに不味かったのか？」

これにはさすがのウィリアムも驚く。店主は知らん顔。この店は早々に潰れるべきである。

「お客さん。お代」

二人分をウィリアムに要求する店主。倒れているカールのことなど見もしない。今すぐにでも潰れなければおかしい。ラコニアで今つぶれてほしい店ナンバー１であった。

「払うよｐ。払えばいいんだろ」

カールの介抱を終えたウィリアムはしぶしぶ支払い、二人分のシチューを平らげた。

「まずい！」

二人分の量を完食したことに驚いているのか、それともまずいシチューを食いきったことに驚いているのか、さすがの店主も驚いていた。

そう言って不機嫌なウィリアムは店を颯爽と出て行った。なんだかんだ言っても、育ち盛りのウィリアムにとって、これだけの量を安価で食べられる店は基調なのである。たとえ不味くても、栄養は豊富なはずなのだ。

「くそ、今日は厄日だ」

どこかに転がしておくわけにもいかず、カールを背負って運ぶウィリアム。アルカスにいた頃なら無視していたが、今は一応同じ隊員。悪い噂を立てられて困る。

「一応、部屋まで運ぶか」

ウィリアム、借りている部屋までお荷物を運ぶ。

「ん、んん」

カールが目を覚ますと、そこにはとても簡素な室内があった。粗末なベッド一つ、あとは日当たりが悪そうな窓と机が一つ。そして窓枠にぶら下がる――

「う、うわっ！？」

ウィリアム。カールの驚いた声を聞いて、ウィリアムは窓枠から指を離した。

「起きたのか。ならさっさと自分の借りている部屋にもどれ。借りてないなら自分の寝袋に戻れ」

「あ、あの、ウィリアムさん一体何を？」

先ほどのマド枠ぶら下がりに驚いているのか、カールは唖然とした表情でウィリアムを見ていた。ウィリアムはバツが悪そうに頭を掻く。

「身体を鍛えているんだよ。懸垂は全身運動だ。荷物を背負えば負荷も好きに掛けられるし、部屋にいてもできるトレーニングだからな」

「懸垂？負荷？」

カールの疑問符はアルカディアにおいて変な反応ではない。そもそもあるかデイアにおいてトレーニングとは剣を振ったり、槍を振ったり、実戦的なものばかり。

懸垂などというトレーニングなどほとんど行われないし、あくまで子供の遊びとしてぶら下がりという意味での言葉として使われる。筋肉に負荷をかけるという概念もない。

「そういう訓練もあるんだよ。詳しく知りたいならスパルティ―教本でも読め。アルカスなら図書館に写しも訳本もあるはずだ」

昔、ウィリアムがアルであった時代。何度も読んだ本である。アルカディアに出回るトレーニングとは比べ物にならないほど、合理的で人体に即した鍛え方が載っている。

「へーウィリアムさんは本も読まれるんですね。博識だなあ」

何気ないカールの言葉にぎくりとするウィリアム。

「ま、まあ。多少知識がある程度だけど」

「それにあるカスから来たんですか？僕もあるカス出身なんですよ。あ、あと兄も本が好きなのでウィリアムさんとは話も合うと思います！」

気づけば墓穴掘りまくりのウィリアム。少し気を抜いていたのか必要ないことを喋りすぎていた。「ふー」と深く息を吐きだして自身を落ち着かせる。

「俺は三級市民、外国人なのでアルカスには少し寄った程度です。その際、図書館にもよって本を読んだだけ。そろそろいいですか？俺も明日に備えて休みたいのですが」

「ウィリアムさんは外国人なんですね！色々聞きた……いけないいけない。もっとお話したいけど、今日はお暇させていただきます。面倒見てくださりありがとうございました！ではまた明日！」

元気よく部屋を飛び出していくカール。扉を閉める前に一礼を忘れない。

閉じた扉を見て、ウィリアムは頭を抱えていた。

「すごく……えんどくさい」

ウィリアムのため息が、狭い室内に響き渡った。